



ロザムンド・ピルチャー

Rosamunde Pilcher

中山富美子◆訳



メリーゴーラウンド



The Carousel



東京創元社

メリーゴーラウンド

ロザムンド・ピルチャー

Rosamunde Pilcher
中山富美子♦訳

江苏工业学院图书馆
藏书章



The Carousel

東京創元社

THE CAROUSEL

by Rosamunde Pilcher

© 1982 by Rosamunde Pilcher
This book is published in Japan
by TOKYO SOGENSHA Co., Ltd.
by arrangement with Rosamunde Pilcher
c/o Curtis Brown Group Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Japan

訳者紹介

聖心女子大学文学部外国語外国文学科英文卒業。主な訳書
コリーン・マッカー『ただ「あなた」だけで美しい』、ケ
イ・フーパー&キャサリン・ハート『クリスマスの恋人た
ち』（PHP研究所）、『コンピューターを創った天才たち』
(共訳 草思社)、『空っぽの家』（東京創元社）他。

メリーゴーラウンド

1998年4月30日 初版

著者——ロザムンド・ピルチャー

訳者——中山富美子（なかやま・ふみこ）

発行者——戸川安宣

発行所——(株)東京創元社

162-0814 東京都新宿区新小川町 1-5

電話 03-3268-8231(代)

振替 00160-9-1565

製版——フォレスト 印刷——恵友社

製本——鈴木製本

Printed in Japan © Fumiko NAKAYAMA 1998

ISBN 4-488-01379-1 C0097

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付下さい。

送料小社負担にしてお替えいたします。

メ
リ
ー
ゴ
ー
ラ
ウ
ン
ド

第一章

九月の陽光が溢れる美しい居間の中央に立っていた母は言った。「ブルー、あなた頭がおかしなっちゃったのね」

母は失望のあまり、今にも泣き出しそうだったが、母が泣いたりしないことがわたしにはわかっていた。というのも泣いたりしたら完璧な化粧はめちやくちやになり、顔は腫れて口は垂れ下がり、ぶざまな皺を強調する羽目になるからだ。どんなに憤慨しても母は絶対に泣いたりはいしない。彼女にとっては見かけこそが何より大切なものだから。そして今、母は敷物を挟んでわたしと向かい合っている。しみひとつないラズベリー・ピンクのウールのスーツと白い絹のシャツを着て、耳には金のイヤリング、手首にはチャーム・ブレスレット、頭には銀の美しいピンを留めて。

とにかく母は怒りとか母親らしい心配、とりわけ失望などの破壊的な感情の葛藤を必死で抑えようとしていた。わたしは母に対して本当にすまなく思った。

わたしは言った。「ああ、お願いよ、ママ、この世の終わりつてわけじゃないんだから」そう言つてはみたものの、かなり説得力には欠けていた。

「あなた、初めて本当に相応^{ふさわ}しい男性に夢中になっていたみたいだったのに……」

「ねえ、相應しいだなんておそろしく古めかしい言葉だわ……」

「彼は魅力的だし、真面目だし、いい仕事に就いてるし、家柄もいいわ。あなたは二十三歳、もう落着いてもいい時期よ。結婚して子供を生んで、自分の家を持ってもね」

「ママ、あの人わたしに結婚してくれなんて頼んだこともないのよ」

「もちろんそうでしょうとも。きちんと順序を踏みたいのよ——あなたを家へ連れて行ってお母様に引き合わせたいのよ。それはちつとも悪いことじゃないわ。彼が考えていることははっきりしているわ。彼があなたのことを熱愛しているのを二人してしっかり認めないとね」

「ナイジェルは何に対しても熱中できる人じゃないのよ」

「まったく、ブルーったら、あなたが求めているものがわからない」

「わたし、何も求めてなんかいないわ」

こんな会話を幾度となく繰り返しているの、坐って暗記でもしたかのように、わたしには自分が喋るひと言ひと言がわかっていた。「欲しいものは何だって持ってます。好きな仕事に小さな自分のフラット——」

「あのひと間ぼっきりの地下室をフラットだなんて言えないわよ——」

「それにわたし落着きたいなんて思っていないの」

「あなたは二十三歳。わたしは十九で結婚したのよ」

六年後には離婚したじゃないと、あやうく言いそうになったが言わなかった。どんなに母の言葉が頭にきたとしても、そんなことは口には出せなかった。母には鉄の意志と鋼鉄の心が備わっているのをわたしは知っていた。それでたいい我が道を行くのだが、彼女にはどこか傷つきやすいところが——華奢な体型、異様に大きな青い目、過剰なほどの女らしさ——それが邪魔して荒っぽい言葉

が吐けなくなるのだ。

それでわたしは開いた口をまた閉じると絶望して彼女を見た。母はわたしを見つめ返した。咎めるように、しかし実際には咎めてはいない。わたしはおそらくもう何千回と、お互いに見つめ合ったはずの今になって、父が母に夢中になった理由を理解した。母の圧倒的な魅力故に二人は結婚し、父は母が初めて異性というものを意識して以来ずっと探し求めてきたまさにその人だったのだ。

わたしの父はヒュー・シャックルトンといい、その頃はロンドンで働いていた。シテイーにあるマリーチャント・バンクで、ライフ・スタイルは堅実で前途は有望だった。が、基本的には陸に上がった魚だった。シャックルトン家はノーサンバランド出身で、父はウインディエッジと呼ばれる農場で育てられた。牧草地は北海まで続き、冷たい冬の疾風がともに吹き込んでくる。父は故郷への愛を失ったことがなく、いつも故郷に憧れを抱いていた。父が母と結婚した頃には父の兄が農場を管理していたが、わたしが五歳の頃、この兄は狩猟の事故で不慮の死を遂げた。父は兄の葬式へ出席するためノーサンバランドへ旅立った。五日間そこに滞在し、家に戻った時には彼の考えは決まっていた。仕事を止め、ロンドンの家売り、ウインディエッジへ戻るつもりであると母に言ったのだ。父は農夫になろうとしていたのだった。

この宣言の後に続いた口論と議論、涙と非難が、わたしの幼い頃の不幸な思い出の中に混じり合っている。母はあらゆることをして父の考えを変えさせようとしたが、父は頑固なままだった。最後には母の堪忍袋の緒が切れ、もし父がノーサンバランドへ帰るといふのなら一人で帰ることになるだろうと言ったのだった。ところが、母が驚いたことには、父は自分の考えを実行したのだった。おそらく父は、母がついてくるだろうと思ったのだろうが母はまさしく強情だった。その年のうちに二人は正式に離婚し、ポールトン・スクエアの家は売られ、母はパーソンズ・グリーンに近い以前よりも

小さい家に引越した。当然わたしは母と一緒にロンドンに残ったが、父との接触を維持するために毎年二週間はノーサンバーランドへ行つた。しばらくして父は再婚した。はにかみやで大きく不格好な娘と。彼女のツイードのスカートのお尻のあたりはいつも、少し出てしまっており、その艶のよいそばかすのある顔には、おしろいのパフが触れたことなどなかった。二人はとても幸せだった。二人はいまだにとても幸せなのでわたしは嬉しい。

しかし母にしてみれば事態はそう簡単にはいかなかった。母が父と結婚したのは、彼女が理解でき尊敬できる男性らしさの規範になつていゝように見えたからだ。彼女は、ピンストライプのスーツやブリーフケースの外観の裏に潜むものを深く追求したことなどなく、隠された内面を暴きたいなどと思つたことはなかった。しかしシャックルトン一族は驚きに満ちており、母が恐れていたことにわたしは一族のそんな資質の多くを受け継いでいた。死んだ伯父は農夫だっただけでなく、アマチュアの音楽家としてもかなりのものだったし、わたしの父は暇があると最高に美しいタペストリーを刺繍した。が、本物の反逆児は二人の妹のフィービーだった。芸術家で、熟練した画家であるフィービーは独創性に富んだ人物で、日々の約束事には無頓着だったので、母などはこの義理の妹に慣れるのに手こずつていた。

若い頃フィービーはロンドンに拠点を置いていたが、中年になると都会の埃を振り払うようにしてコーンウォールへ住むべくやつて来て、チップス・アーミティジという魅力的な彫刻家と幸せな同棲生活を送つた。二人は結婚することはなかったが——彼の妻が離婚したからなかったかと思うのだが——彼は死に際にペンマーロンにあるヴィクトリア風ゴシック様式の小さな家をフィービーに残し、以後フィービーはずっとそこに住んでいるのだった。

この小さな社会的問題にもかかわらず、母はフィービーを完全に無視することはできなかった。と

いうのはフィービーはわたしの代母だからだ。時折母とわたしは、彼女のところに招かれて滞在したものだ。手紙からは、わたし一人で来てほしいという思いがあり、うかがえたが、母は彼女の自由奔放な影響を恐れて、もし母がシャックルトン一族を打ち負かせないなら彼らに合流するという原則のもと、少なくともわたしが子供の頃にはいつもわたしについてきた。

初めてコーンウォールへ旅した時、わたしは不安でいっぱいだった。ほんの子供だったが、母とフィービーに共通するものは何もないということをよく知っていたので、二週間も続く意見の相違や、ぎくしゃくした沈黙がとても怖かったのだ。が、わたしはフィービーの洞察力を過小評価していたのだ。フィービーはこんな状況を氣遣つて母をミセス・トリヴァーに紹介した。ミセス・トリヴァーはペンマーロンのホワイト・ロッジに住み、ごく少数の完璧に保守的な友人たちがいた。彼らは午後のブリッジや小さなディナー・パーティーに喜んでわたしの母を誘い入れた。

天氣の良い日には、母は彼らと満足そうにカード・ゲームをし、その間、フィービーとわたしは浜辺を歩いたり、古びた堤防の傍らにイーゼルを立て掛けたり、フィービーが移動式スタジオとして使っているオンボロのフォルクスワーゲンを内陸へと走らせ、荒地を上り、海そのものから反射しているかのように白くきらめく光の中に横たわる景色に、我を忘れたりしたのだった。

母の敵愾心にもかわらず、フィービーはわたしの人生に多大なる影響を及ぼした。描くという形を取った遺伝により受け継いだ才能という無意識な影響と、もうひとつはもっと現実的な影響——プレッシャーと言えるかもしれない——で、フィレンツェで勉強し、美術学校へ通うというわたしの決意を固め、ついにはコーク通りにあるマーカス・バーンスタイン画廊での現在の職に辿り着いたというわけなのだ。

そして、母とわたしの今の喧嘩の原因はフィービーだった。数か月前からナイジェル・ゴードンが

わたしの人生に登場してきた。彼は、わたしがほのかに好きになった人の中で初めて保守的然としていたので、引き合わせるため家に連れてきた時、母は嬉しさを隠せなかった。彼は母を喜ばせ、ちょっとびり心をくすぐるようなことを言ったり、花を持ってきたりした。そして彼がわたしを彼の母親に引き合わせて、家族と過ごすべくスコットランドへ招待してくれていることを知ると、母はどうしようもなく興奮した。母は既に荒れ地歩き用にツイードのニッカーボッカーを買いて求め、更にタイムズ紙に載る婚姻通知、装飾を施された招待状、後ろ姿が美しく見えるようなデザインの白いウェディング・ドレスをわたしが身に着けたロンドンでの結婚式へと、彼女の想像力は全力疾走して、興奮が頂点に達しているのをわたしは知っていた。

ところが、こんなかわいらしい空想はすべてフィービーによって終止符を打たれてしまったのだ。フィービーはこともあろうに腕を折ってしまい、石膏のギプスで腕をしっかり固定させ、病院から彼女の小さな家であるホーリー・コテージに戻ったその日に電話で、わたしにしばらく来てくれないかと頼んできたのだった。それは自分自身の面倒を完全にみられないからというわけではなく、車の運転ができないこととギプスがはずせるまで身動きがままならないのは耐え難かったからだだった。

受話器を通してフィービーの声を聞きながら、わたしは途方もない安堵感に満たされた。それは、わたしがゴードン一家と過ごすためにスコットランドへ行きたくなかったからにすぎないことは正直に認める。わたしは、ナイジェルとまだそんなに深く関わる準備ができていなかったし、ナイジェルとの約束をうまくごまかせるまっとうな言い訳を無意識のうちに探し求めていたのだった。そして、まさにお膳立てが提供されたというわけだった。何のためらいもなくわたしはフィービーに行くと言っただけ、ナイジェルにはスコットランドへは行けないと言ったのだった。そして今、母とこうして向かい合っているのだ。

母はすっかりしよげ返ってしまった。

「コーンウォールですって。フィービーですって」最悪の袋小路にでも突き当たったかのような言い方だった。

「行かなくちゃならないわ、ママ」わたしは何とかして母の笑みを誘い出そうとした。「叔母さんは腕が何ともなくなつたって、あのオンボロ車の運転には手を焼いているんだから」

しかし母は面白がるどころではなかった。「土壇場^{どたんば}で約束を破るなんて不作法よ。もう二度と招待してもらえないわ。ナイジェルのお母様は何て思われるかしら？」

「わたし手紙を書く。きつとわかつてくださると思う」

「それにフィービーなんかと一緒だったら……汚い学生たちや、手織りのポンチョを着たとんでもない女たち以外、だれとも知り合いになれないじゃない」

「ミセス・トリヴァーが、わたしに合つた人を見つけてくださるかもよ」

「馬鹿なこと言うんじゃないやしません」

わたしはやさしく言つた。「わたしは、わ、た、しの人生なのよ」

「いつもそんなこと言つて。イズリントンのぞつとするような地下室へ引越した時にもそう言つたわね。こともあろうにイズリントンだなんて」

「とつてもトレンドイーなんだから」

「それに、あのとんでもない美術学校へ入学した時にも……」

「少なくともわたしは完璧に立派な職業に就けたんだから。それは認めるべきよ」

「結婚すべきなのよ。そうすれば仕事なんかしなくてすむじゃない」

「たとえ結婚したとしても、仕事をやめたくないわ」

「でもね、ブルー、これは未来の話じゃないのよ。あなたにはまともな人生を送ってほしいの」

「まともな人生だと思っけど」

わたしたちは長いこと睨み合っていた。それから母は深い溜息をつくときらめた。明らかにひどく傷ついたようで、わたしは当座は議論が終わったことがわかった。

母は哀れっぽく言った。「あなたのこと、まったく理解できないわ」

わたしは母を抱き締めに行った。「しなくていいのよ」わたしは言った。「ただ元氣を出して、わたしのことを好きでい続けてちょうだい。コーンウォールから葉書を出すわ」

わたしはペンマーロンまで、車ではなく汽車で行くことにした。翌朝パディントンまでタクシーに乗り、乗るべき汽車を見つけた。席を予約しておいたのだが、汽車は込み合っていないかった。洪水のような行楽客たちの姿は九月の中旬までに消えてしまっていたのだ。わたしがちょうど鞆を積み込み、座席に坐ると、窓をコツコツ叩く音がした。見上げると外に男性が一人立っていて、片方の手にブリーフケースを、もう片方の手には花束を持っていた。

驚いたことにそれはナイジェルだった。

わたしは席を立ってドアのところまで戻り、プラットフォームへ下り立った。ナイジェルは氣弱そうな笑みを浮かべてわたしのほうへやって来た。

「ブルー。きみのこと、見つけられないかと思った」

「いったいこんなところで何してるの？」

「見送りに来たんだ。良き旅を願ってね」

彼は花束を差し出した。それは小さなぼさぼさした黄色の菊だった。「それからこれをあげようと

思つて」

わたしは意外にもとても感動した。ナイジェルが駅まで来てくれたのはわたしを許すという寛大な意思表示で、わたしが彼をがっかりさせた理由を理解してくれたことをはっきりさせるためであることがわかった。わたしは、かつて感じたことがないほど自分が卑劣な人間に思えた。はりのある白い紙にくるまれた花束を受け取ると、その中に鼻を埋めた。とてもいい匂いがして、わたしはナイジェルを見上げて微笑んだ。

「十時だわ。オフィスに行つてなくちゃならない時間でしよう」

彼は頭を振った。「急ぐことはないんだ」

「あなたが金融業界でそんなに偉い人だなんて知らなかったわ」

ナイジェルはにやりとした。「そうじゃないけど、定刻に出席する必要はないんだ。とにかく電話は入れておいたから。遅刻することをね」頭のとっぺんの金髪は薄くなり始めていて、分別のある成熟した顔をしていたが、こんなふうにならんと笑った時などはまるで少年のようだった。気紛れな叔母のフィービーの看病をしに行くために、こんな魅力的な男性をあきらめるなんて、わたしはもしかして頭がおかしくなったんじゃないかしらと思ひ始めた。結局は、母の言い分が正しかったのかもしれない。

わたしは言った。「がっかりさせちゃつてごめんなさいね。昨日の夜、あなたのお母様に手紙を書いたの」

「きつとまた別の機会に……」ナイジェルは寛大に言った。「とにかく連絡は取り合おう。いつロンドンに戻るか知らせてくれるね」

もしわたしが頼めば、彼はわたしを待つていてくれることはわかっていた。わたしの乗った汽車を

出迎えて、イズリントンまで送ってくれ、わたしがロンドンから離れたりしなかったかのように元どおりの関係に戻すだろうと。

「知らせるわ」

「叔母さんが早く元気になることを祈ってるよ」

「腕を折っただけなんだから。病氣じゃないのよ」

ちよつとの間、気まずい沈黙があつてからナイジェルが言った。「じゃあ……」彼はわたしの頬にキスしようと前へ出たが、それはキスというより唇を軽く触れただけだった。「さよなら。良い旅を」
「来てくれてありがとう。お花もありがとう」

彼は後退りしてさよならという曖昧な身振りをしてから、向きを変えて歩み去った。ポーターや、手押しのカートやスーツケースを手にした家族連れなどがごちゃごちゃしている間を通り抜けていく彼の後ろ姿を、わたしはじっと見つめた。改札口で彼はもう一度振り向いて、それが最後だった。わたしたちは手を振り合い、彼は行ってしまった。わたしは汽車の中へ戻ると網棚に花束を押し込んでふたたび座席に坐つた。来てくれなくてもよかったのにと思つた。

わたしはシャックルトン家の氣質を非常に多く受け継いでいるが、折りにふれ、母に由来すると思われるあてどのない感情が心の表面に浮かび上がってくる。それはちやうどこんな時にだった。ナイジェルと一緒にいたくないなんて、ナイジェルと関わり合いたくないなんて、ナイジェルと人生を共に過ごしたくないなんて、きつと頭がおかしくなつてしまったのだわ、と。当然のこと、落着くなどという考えにはわたしは馬のように抵抗するのだが、この瞬間、こうしてパディントン駅で汽車の座席に坐つて窓の外を見つめていると、不意にそれがとてもなく魅力的に思えてくるのだった。安全、それこそ、この頼りがいのある男性がわたしに与えてくれるものだった。ロンドンのがっしりとした

彼の家に住み、休日にはスコットランドへ行くことを想像してみた。お金のためではなく、働きたいと思えば働く。子供をつくることも考えた……

声が出た。「すみませんが、この席は空いていますか？」

「えっ……？」わたしが見上げると男が通路に立っていた。小さなスーツケースを手にして傍らには子供がいた。十歳ぐらいの小さなほっそりした黒い髪の少女で、ふくろうのような丸い眼鏡をかけている。

「ええ、空いています」

「よかった」男は言う、スーツケースを持ち上げて網棚に載せた。その男には楽しい霧雨気がまるでなく、そのいらいらした態度にわたしは菊の花束に気をつけてと声を掛けそびれてしまった。彼はナイジェル同様シテীরオフィス勤めらしく、紺地に白の縦縞のスーツを着ていた。が、最近体重が増えたのか（とてつもなく贅沢な午餐のせいではないだろうか）そのスーツは彼の体型には合っておらず、スーツケースを持ち上げている間、スーツからはみ出た高価なシャツと引っ張られているボタンが間近に見えた。彼は色黒で、おそらくかつてはハンサムだったのだろうが今では顎が重く垂れ下がり、顔は赤らみ、白髪混じりの髪は襟の後ろで長く伸びており、おそらくてっぺんの薄さの埋め合わせをしているのかもしれない。なかった。

「ほら」彼は少女に言った。「さあ、坐って」

少女は座席の端に注意深く坐った。彼女は漫画新聞を手にして、赤い革のバッグを肩からかけていた。顔は青白く、髪は短く、長くほっそりした首を出していた。この外観と眼鏡と禁欲主義的にみじめな表情とで少女は少年のように見え、わたしはプラットフォームで見かけたごわごわした真新しい制服に身をちぢこめ、必死で涙をこらえながらでっぴり太った父親たちから寄宿学校がどんなに楽し

いところかを聞かされていた少年たちのことを思い出した。

「切符はちゃんと持ったね？」

少女はうなずいた。

「おばあちゃんが駅まで迎えに来てくれるからね」

少女はふたたびうなずいた。

「それじゃ……」男は片手で頭の後ろをなでた。ここから早く立ち去りたいと思っているのは明らかだった。「これでいい。大丈夫だから」

また少女はうなずいた。二人は笑みを浮かべるでもなく、互いに見合い、男は立ち去りかけて何かを思い出したようだった。

「さあ……」彼は胸のポケットをまさぐり、ワニ革の財布から十ポンド紙幣を一枚取り出した。「食べなくちゃならないから、時間になったら食堂車まで行つて何かお昼をお食べ」

少女は十ポンド紙幣を受け取ると、それを見ながら坐っていた。

「それじゃあ、ね」

「じゃあ」

男は行つてしまった。窓のところで彼は立ち止まると手を振り、おぎなりの笑みを浮かべた。それから手入れが行き届いた派手な車のほうへと急いで姿を消した。きっとその車で安全で男性的なビジネスの世界へと戻るのだろう。

ちょうど、ナイジェルは立派だと自分に言い聞かせていたところだったが、今度は、この男はなんて嫌な男だろうと一人ごち、どうしてあんなに魅力のない男が少女の見送りになど来たのだろうと不思議に思った。少女はわたしの側で鼠のようにおとなしく坐っていた。しばらくして彼女はバッグを